

## 「恋愛」と「貧困」

—— ルイーゼ・オットー＝ペーターズの『城と工場』

菅 利恵

はじめに

「全ドイツ女性協会 Allgemeiner Deutscher Frauenverein」を立ち上げ（一八六五）、「ドイツ最初のフェミニスト」として知られるルイーゼ・オットー＝ペーターズ<sup>(1)</sup>は、一八四九年の「女性新聞『Frauen-Zeitung』」の網領で次のように書いている。

あらゆる時代の、とくに現在の歴史は私たちに教えてくれる。自分自身について考えることを忘れたものは忘れ去られてしまう、と。——これは一八四八年五月、私がザクセンの男性労働運動家たちに初めて宛てたメッセージからの一節である。このとき頭にあったのは、貧しい女性労働者のことだった。彼女らが忘れられてしまわないように、そのために語ろうと思って書いたのである。<sup>(2)</sup>

ここに述べられているように、当時彼女が目指したのは、労働をめぐる公的議論のなかで忘れられがちな「貧しい女性労働者」の存在を目に見えるものにするにすぎなかった。その意図は次のようにもっと直接的に表現されてもいる。

労働者を組織化するならば、女性を忘れないでほしい。工場で働く女性たちを、日雇いで働く女性たちを、刺繍編み、お針子などのことを、忘れないでほしい。<sup>(3)</sup>

「忘れないで」もらうための手立てとして、彼女は記事や論文のなかで手工業にたずさわる女性や女中の労働実態をいくども具体的に紹介した。たとえば『女性新聞』の記事「女性労働者のために」には次のようにある。

エルツ山地のボビンレース編みについて、私は何と言えがいいのだろう。(…)レース編みの女性が、非常に手間のかかる黒シルクレースに取り組んでいるところを見たことがある。細く黒い絹糸を煌めく針先に巻き付けるのは目にこたえるようで、夕方にはもう仕事はできなくなるという。それでも黒レースの方が実入りが良いからありがたいのだという。一日に半エレ分働けば、夕方にもっときつい仕事をしなくても、一グロッシエンは手に入るのだ。(…)買い手が一エレの完成品に支払うのは二グロッシエン。必要な絹の値段も同じくらいである。それが市場では、二〇グロッシエンで取引される。売買と製造の恐ろしいシステム、そしてその犠牲のことを思うと、ペンを保持つ手が震えてしまう!<sup>(4)</sup>

こんなふうに女性労働の現状と問題に光を当て、産業構造のなかで「女性」が食い物にされる実態を繰り返し告発した

ことから、ルイーゼ・オットーは「赤い女性民主主義者」とも呼ばれている。<sup>(3)</sup>

「女性」の現状を問題化した「ドイツ最初のフェミニスト」が、なによりもまず「労働」と「貧困」の主題に注目したのは、時代の必然でもあっただろう。ナポレオン戦争で神聖ローマ帝国が解体した後のドイツ語圏では、出版の自由をはじめとする民主主義のための自由が抑圧された一方経済的な自由化は着々と進められており、競争ばかりが激化して格差と深刻な貧困が社会問題となっていた。ルイーゼ・オットーが発言を始めたのは、亀裂が誰の目にも明らかとなった一八四〇年代であり、怨嗟の声を燃料にした現状打破の運動がさまざまに活発化した時代であった。愛国的自由化運動と運動して増えはじめた女性活動家たちの目も貧困問題に向けられており、ルイーゼ・オットーも、そんな流れに加わるかたちで働く女性の貧困問題を訴えたのである。<sup>(4)</sup>

もちろん漠然と時代潮流に乗ったわけではない。身近な日常でも旅先でも、女中や手工業にたずさわる女性たちの苦境を目の当たりにする機会は多かった。先の引用ではエルツ山地のレース職人に光が当てられていたが、エルツ山地は彼女と縁の深い場所である。のちに彼女はこの地出身の社会派作家アウグスト・ペータース August Peters と結婚しているが（一八五八）、彼と出会う前から、ここは彼女にとって社会への問題意識が刺激され深められる場所であった。初めて紡績工場とそこで働く人々を目にし、これまで思いもよらなかった悲惨の存在に目を開かされたのは、一八四〇年に姉を訪ねてエルツ山地北部エデランに滞在したときのことである。<sup>(5)</sup>

ルイーゼ・オットーは一八一九年、ドイツ連邦の一角を成すザクセン王国マイセンに生まれた。まだ少女のころに両親を病で失うが、医師であった祖父の代に築かれた堅実な財産基盤のおかげで、姉たちとともに良家の体裁を失うことなく暮らし続けることができた。それでも、姉たちも結婚して叔母と二人家に残されると、若くして家政に責任を持たねばならない立場に置かれ、生活費のやりくりや財産の管理に日々知恵をしばることになる。相続した家の一部か

ら家賃収入を得てはいたが、いつかは経済的に行き詰まるかもしれないという不安ともけつして無縁ではないところにいた。一八四九年に書かれた記事のなかでは、一見困っているようには見えないけれども実は苦しいふところ事情を抱え、表面を取り繕うためにせつせと手仕事にはげまねばならない市民女性に光が当てられている<sup>(9)</sup>。男性の扶養者を失って収入の道をたたれ、それでも体裁を保つために四苦八苦せねばならない女性たちの苦境は、彼女にとって他人事ではなかった。「女性新聞」掲載の論考のひとつには次の一文がある。

働く女性の地位にとって最も危険な見解は、女性たちを直接ではなく、間接的にのみ支援しようとするものである<sup>(10)</sup>。

ここで「間接的」な支援とは、「女性」の経済状況を、養い手と見なされる「男性」の支援を通して改善しようすることを指す。父親や夫が十分に稼ぐように支援されれば、娘や妻も「間接的」に助けられるというわけだ。しかしこの理屈は「女性」が「男性」のなんらかの扶養に入っていることを前提としており、働く「女性」をはじめ、この前提にあてはまらない人が対象からはずされている。「扶養する男性」と「扶養される女性」を基軸としてまわる社会のなかで、「女性」の位置に置かれた者は常に潜在的な貧困予備軍となる。「ドイツ初めてのフェミニスト」が「赤い女性民主主義者」でもあったことには幾重にも必然性があった。

複数の雑誌や新聞に現状告発や社会批判の論説を精力的に寄稿し、労働をめぐる同時代の議論に「女性」の目線を持ち込もうとしたルイーゼ・オットーが、その文筆活動の出発点としたのは詩や小説という文学の領域だった。現実社会の動向に強く規定されたその作品群は概してイデオロギー的な傾向文学として位置付けられているが、その内容には幅<sup>(10)</sup>

もある。読者の感情移入を感傷的に誘いつつ、現状の問題を広く共有することをねらったわかりやすい小品がある一方で、虚構の人物がたどる紆余曲折を通してひとつの主題をさまざまな角度から検証し、問題のありかを多面的に探ってゆくような、もっと複層的なつくりのものもあった。一八四五年に書かれ、検閲による修正をへて一八四六年に発表された『城と工場』は後者のひとつである。三〇年にわたる執筆活動のなかでルイーゼ・オットーが残した小説は一八ほどとされており、<sup>(1)</sup>ほかに詩集や自伝、また数多くの記事や論文を発表しているが、これまでに全集や選集が編まれたことはなく、その全体像にアクセスすることはそもそも容易ではない。『城と工場』については、出版前に検閲で待ったがかかり、直談判のすえ当局の修正注文を飲み込んでようやく出版にこぎつけた経緯があり、残されていた修正前のテキストを含む完全版が一九九六年に解説つきで出版され、二〇二一年にもその新版が出されて、彼女の作品のなかでは入手しやすいもののひとつとなっている。人びとが「女性」の問題をもっと認識すること、そして公的領域における「女性」の権利強化を求めたその活動の初期に生まれた『城と工場』のなかで、「女性」をめぐる問題意識と「貧困」への問題意識は、どのように重なりあっているだろうか。

## 1 「恋愛」と「貧困」

『城と工場』は通常、「社会小説」あるいは「工場小説」として紹介される。<sup>(2)</sup>ルイーゼ・オットー自身、この小説を通してなによりも「社会」問題と取り組んでいたことをはっきりと書き残している。

つよい興奮のまま、痛みを感じながら私は一冊の小説を書いている。『城と工場』である。無力な少女のありったけをそいで、この世紀の難題、社会の問題に、臆病に目を閉ざすのではなく一歩踏み込んで近づく、その力にな

りたいと思うのだ。<sup>(1)</sup>

先にふれたようにこの作品が書かれた一八四五年ころは、機械制生産の発展と競争の激化にともなう労働条件の悪化、それに飢饉が追い討ちをかけて貧困が深刻化しており、これがジャーナリズムを介してさまざまに告発されて、社会運動への機運が強められていた。一八四四年シュレージエンの織工による暴動は、同年ハインリヒ・ハイネの詩「シレジアの織工 Die schlesischen Weber」にも謳われて亀裂の救いがたさを広く人びとに実感させた。ドイツのヨルジュ・サントとも言われたルイーゼ・アストンもこの事件に大きな関心を寄せており、印象的な詩（「Lied einer schlesischen Weberin」、一八四六）を残している。ルイーゼ・オットーの『城と工場』もまた、不穏な社会状況への危機感に押され、これに立ち向かう道を探ろうとして書かれた作品のひとつであった。

とはいえ『城と工場』を読みはじめても、しばらくはいったいどのあたりが「社会小説」なのかよくわからないだろう。なにしろ最初の舞台は良家の令嬢たちがあずけられた寄宿学校で、「社会小説」らしからぬ優雅な雰囲気が漂っているのだ。少しだけ、小説の冒頭部分を引用しよう。

夜の十時。うら若き伯爵令嬢エリザベト・フォン・ホーエンタールも、寮則に従い明かりを消してベッドに入った。けれどもすぐにもぞもぞと動き出し、身を起こして天蓋のカーテンをそと開いた。鈍い月明かりを背に受けながら、小さな頭を伸ばして開かれたドアのあたりをうかがう。それから声をひそめて呼んだ…

「アウレリーエ！」

呼びかけに応じて、軽いネグリジェ姿の若い娘が、音を立てないようかわいらしいスリッパを手に持ち、くすくす

笑いながら軽やかに駆け寄ると、ベッドサイドの肘掛け椅子に身を投げだした。

「あら、お厳しいご主人様。」笑いながら言う。「ご命令とあらば馳せ参じましょう。私、聞きたくてうずうずしているんだから。刺繍の時間もうわの空、チェックに出す前に三回もほどかなきゃならないなんて、いったいどんな大計画に気を取られていたっていうの。さあ白状なさい。」(27f)

伯爵令嬢エリザベト・フォン・ホーエンタールはこの小説の主人公のひとりである。題名に含まれた「城」は、広大な領地に建てられた由緒ある彼女の実家を意味しており、「工場」はもうひとりの主人公の実家の父が、紡績工場を大規模に経営する有数の資本家であることによる。このもうひとりとは右の「かわいらしいスリッパ」の Ауレーリエではなく、パウリーネ・フレヒナーという名の生真面目な少女だ。貴族ではないことから、この寄宿学校のなかで浮いた存在となっている。けれども、恵まれた環境でな不自由なく育ったお嬢様という点では周りとかわらなかつた。そんなパウリーネとエリザベトの外見は次のように描き出されている。

愛らしい眺めだつた。パウリーネは、縁がひらひらした丸い麦わら帽子をかぶっている。ブロンドの髪は下でなめらかに分けられ、小さく優しい体は、黒いベルベットを首元で結ぶ、ピンク色のふんわりとしたドレスに包まれている。全体的にその姿にはどこか牧歌的なところがあつた。一方、エリザベトの姿は対照的な印象を与えるものだつた。長いブロンドの巻き毛にチュールのベールを巻き、気高くほっそりとした体を袖の広い黒い毛織物のドレスに包み、華奢な腰に長いベルトを締めている。それは女城主のようであり、遠い昔の修道女のようでもあつた。(130)

可憐で上品な少女たちのよそおいは、「社会小説」の登場人物というよりは少女小説のそれにふさわしいだろう。

全編を通して、この小説は可憐な二人の少女エリザベトとパウリーネが紆余曲折をくぐり抜けて成長してゆくさまを描いている。その展開において二人が貧困に陥ることはなく、陥るかもしれない危険もほとんど生じない。安定した経済基盤に守られた彼女たちは、日々のやりくりに悩むこともなく、その悩みや期待の大きな部分は恋や友情といった私的な情愛関係の成り行きに向けられている。とくにせつない恋の展開には重要な意味が与えられており、恋する相手との距離が縮まる陶酔的な気持ちの高まりは、ひとときわたくしロマンティックに表現されている。親しい友を見つけて愛する人とめぐりあう、その流れだけを追うならば、これは社会小説というよりもむしろ感傷的な恋愛小説である。

ではこの「恋愛小説」はどのようにして「社会小説」となるのだろうか。それを考えるときに重要なのは、この小説における恋愛描写に、ひとつの目立った特徴が見られることである。すなわち以下にみるとおり、ここでは親密な関係の描写が、かならず「貧困」のモチーフと結びつけられているのだ。

先の引用でエリザベトは、刺繍の時間にうわの空だったことを級友にとがめられていた。人目に立つほど彼女がぼんやりしていたのは、敬愛するタールハイム先生が実は貧困に陥って苦しんでいると聞いたからである。教師としての収入では家族を養うことができず、しかも妻が病気になるって一気に極貧状態に転落したタールハイム先生は、エリザベトが初めて崇拜にも似た恋心に向けた相手だった。彼は貧しくともゆたかな教養を持った男性で、エリザベトはその啓蒙主義的な完全性への希求と、人道主義を重んじる崇高な考えに大いに感銘を受けていた。そして彼に憧れと恋慕のまなざしを向けるなかで、彼女の視界に、深刻な貧困の問題が入り込んでくるのである。

彼女がパウリーネと感傷的な友情を結んだいきさつにも、貧困のモチーフが密接に関係していた。というのも身分の

違う二人を結びつけたのは、貧しい人を救いたいという共通の情熱にはかならなかったのだ。寄宿学校の他の少女たちはみな、贅沢を当然のように享受して貧乏人を平気で見下している。そんななかで二人はおたがいにとって、タールハイム先生から触発された人道主義を分かちあうことができる唯一の相手だった。二人は周囲の誰からも理解されない崇高な思いをひそかに温めあい、寄宿学校を離れてからも、この思いを通してかけがえのない絆を深めてゆく。パウリーネが工場労働者たちの困窮を目の当たりにすると、その衝撃と不安はエリザベトにすみやかに共有されるのである。

貧困への問題意識を共有することで特別な親密さがうながされ、深められてゆくという構図は、物語の後半に展開する二人の恋愛物語にもそのまま繰り返される。実家に戻ったパウリーネは、父フレヒナー氏の工場で働く労働者のフラッツ（偶然にもタールハイム先生の弟であった）と恋に落ちる。かたや工場主の娘でかたや労働者と、立場をまったく異にする二人だったが、困窮する労働者を救いたいという切実な思いにおいて、深く共鳴しあう。フレヒナーの工場では年端もいかない子どもたちが一日中働かされており、あるときそのひとりが機械の事故で大怪我をする。二人は苦しむ小さな命を助けようと奔走し、その過程で、たがいの心はかつてなく重なり合うことになる。

一方のエリザベトは、妻と破局し心機一転スイスに旅立つタールハイム先生を涙ながらに見送ったあとに、新しい出会いをしていた。ポーランド貴族で作家のヤロミーアである。繊細な感性と詩的な関心を共有する二人が、決定的にその距離を縮めることになった過程にも、やはり貧困のモチーフが一定の役割を果たしている。あるときエリザベトは両親もヤロミーアもいる貴族の一行と散歩をしていた。そのなかで、最近労働者に不穏な動きが見られることが話題になる。労働者たちの苦境を見ようとせず、彼らの「道徳的な墮落」を蔑むばかりの貴族たちのなかで、エリザベトとヤロミーアだけはちがう意見を持っていた。二人とも、労働者が耐え難い貧困に苦しんでいることを理解しており、このまま状況を放置すればいつか必ず恐ろしいことがおこるかと考えていたのである。ここで意気投合したことから、二人はた

がいの間に特別なつながりがあることを実感する。

### 3 恋愛と自己主張

このように『城と工場』では、貧困の主題こそが友人や恋人同士のひそかな共通項となり、特別な情熱に火をつける。「貧困」は親密さをかけがえない結合へと転じさせる触媒にはかならないのだ。

ではこの親密さはそれ自体どのような性質を持つのだろうか。そもそもこの作品の登場人物にとって親密な情のつながりとはなんだろう。エリザベトの言葉には次のようにある。「私が愛と呼ぶのは、いつでも上に引き上げてくれる力を持つもののなの。そう、自ずと自分を鼓舞してくれるようなもの。」(88) ここでは愛が、個人の意志を理想主義的に引き上げる力としてとらえられている。

実際エリザベトはタールハイム先生への愛を通してその感傷的な理想主義を膨らませており、彼女にとって恋愛は良いもの、美しいものを追求する自己を後押ししてくれる力であった。謎めいたところがあり過去に傷を持つヤロミニアへの気持ちは、もつと生活世界と結びついた現世的なものだったが、愛が理想主義的な自意識を支えるという構図自体は変わらない。エリザベトの両親は、娘の結婚相手として別の貴族を想定しており、娘がヤロミニアと愛を育んでいると知っても二人の結婚に乗り気にはなれない。そんな両親に対して、情熱に駆られたエリザベトは「心の権利」を宣言する。

胸が痛いほどに強く打った。情熱の奔流に押されて、エリザベトの口から言葉が飛び出した。「いいえ、お母様——こんなにも心が高鳴っているときは、心の方に権利があるの、礼儀作法に縛られる必要なんかないのわ。さ

あ、ヤロミニア、手を取り合ってお父様のところに行きましょう。そして私たちを祝福してくださいってお願いしましょう。」(328)

ここでは恋愛がそれ自体「礼儀作法」に縛られない人間的なものの発露としてとらえられており、自身の主張を通す「権利」の根拠として明確に位置付けられている。

愛のこうした位置付けには、一八世紀的な構図の名残を指摘することができるだろう。すなわち当時は新しい社会体制の胎動期であり、人間的で自由な感情としての愛が、作法と打算に縛られた宮廷社会の空虚さに対抗する力として打ち出され、勃興する市民的主体の道德的な自己像を後押しする機能を持たされていた。理想主義的な自己表現の糧としての愛、ということは、とりわけ劇作家フリードリヒ・シラーの作品に特徴的に見られたが、作者ルイーゼ・オットーは生涯シラーを愛好しており、その少女時代にも次のようなエピソードが残されている。あるとき、少女ルイーゼはシラーの『ドン・カルロス』に登場する革命的理想主義者ポーサ侯爵のセリフを口ずさんでいた。彼が専制君主フェリペ王に対峙し、臆することなく心の自由を要求してみせる有名な場面である。これを客人が耳にして、年端もいかない少女なのにと驚き、少女の叔母に懸念を伝えたという。

子どもにそんなものを読ませるなんて、と人から非難された叔母は、私からシラーを取り上げてしまいました。私はカッとなって言い返しました…どうぞご自由に！ オルレアンの少女でもメアリ・スチュアートでもテルでも、大事なところは全部それで言えるんだから！<sup>(15)</sup>

この反骨心には『城と工場』のエリザベトにも通じるものがある。エリザベトの場合、シラーの作品ではなくシラー的な恋愛、すなわち理想主義の発露としての恋愛が、その反骨心の燃料となっている。注目に値するのは、この反骨心があるまま、性差の制度への異議申し立てにもつなげられていることである。<sup>(1)</sup>ここでエリザベトは、両親に自らの結婚の自由を主張することを通して、伯爵家の因襲的な家族観にあらがう姿勢を明確に打ち出しているのだ。彼女とヤロミニアの関係性は、よくある恋人どうしのイメージからそれほど離れていないようにも見えるが、それでも、ヤロミニアは女性の権利を擁護する詩を書くような男性として描かれており、二人の繊細な関係性に、新しい男女関係への期待が込められていることは確かだろう。ここでは私的な愛が自由な自意識の表現となり、個人的な情熱が政治的な理想主義につながるというシラー的な構図が受け継がれ、さらに、感傷的な恋愛が、性差の秩序を変える起爆剤としてとらえなおされている。

『城と工場』において、恋にあおられた改革的野心は、筋の流れとともに貧困問題にも向けられることになる。「貧困」は登場人物たちの親密さに火をつけるだけでなく、親密に結びついたものたちの反骨的な理想主義それ自体が取り組むべき対象として位置付けられてゆくのだ。とくにパウリーネとフランツは、工場労働者の暴動をクライマックスとする流れのなかで、この問題との真剣な格闘をせまられることになる。

#### 4 貧困と「見えないもの」

「恋愛」と「貧困」が密に結び付けられることによって、『城と工場』は「恋愛小説」であると同時にまぎれもなく「社会小説」と呼びうるものになっている。「貧困」はここで、私的な愛を触発し、触発しつつこれを社会的なものにつなげる機能を与えられている。

このように書くと、「貧困」のモチーフが「愛」のモチーフに従属しているように思われるかもしれない。けれども実際のところ、『城と工場』における貧困描写は苛烈で生しく、感傷的な愛情描写のどこか牧歌的な雰囲気とはむしろ明確に対立的である。甘い恋とはけつして折り合わない、救いのない貧困のありさまが描かれる際に、とりわけ特徴的と思われるのは、そのような「貧困」と優雅な主人公たちの出会いが、以下に示すように、なにか未知のもの、自分とは決定的に異質なものとのお会いとして強調されていることである。

パウリーネはもともと、人の力になりたいという善良な思いとタールハイム先生の教えから、また寄宿学校で貴族の娘たちに平民の子として馬鹿にされた経験から、貧しい人たちに寄り添う気持ちが強く、彼らに漠然と親しみを抱いていた。けれども大きな工場を経営する実家の父のもとに帰ると、彼女はそれまで自分が貧困の実態をまったく知らなかったことを思い知らされる。寄宿学校から実家までの道のりで、彼女を乗せた馬車が、父の工場で働く人々が住む一角を通りかかる。見栄っ張りの彼女の父は、娘の帰郷を歓迎するために館を灯りで飾り、花火を打ち上げていた。しかし馬車に乗ったパウリーネの耳には、華やかな花火を呪う人々の声が聞こえてくる。

ボロを着た女たちが、泣きわめく子を腕に抱き、荷馬車が通る道沿いの石に座っていた。到着の合図として塔の前に花火が打ち上がり、鐘が鳴らされた。「花火もかい！」女の一人が言う。「灯りだけじゃあ、あたしらの惨めさを照らし出すのに足りないってわけか。」「本当に馬鹿にしてるよ」と別の女。「あの旦那、罪深い稼ぎの金を、あたしらの苦勞に報いるんじゃないくて、火の玉にして打ち上げちまってさ。」「エルゼ、いいんだ」みすばらしいなりの男が割って入る。「あの導火線が俺らの復讐の声を天に運ぶのよ。天の方でお断りなら、悪魔でもいい、俺たちにやあこのこぶしがある！ 仕事で鍛えてっから、パンチは効くぜ。」威嚇するように腕を振りあげた。（…）

パウリーネは震え上がった。衝撃と不安をこらえきれず、急いでポケットから財布を引っ張り出すと、入っていた数ターラー分の小銭を車からばらまいた…

「そんなに貧しいのなら、取って、取ってちょうだい。これ以上ないけど、悪く思わないで！」幼い声が、いままで感じたことのない恐怖で震えていた。

みな動物のような喜びの声を上げてお金に群がり、乱暴な奪い合いがはじまった。彼女は、下品な声が聞こえなくなるように、ビロードの帽子で耳をしっかり押さえつけた。(102)

このようにパウリーネが出会った貧しい労働者たちは、感傷的な哀れみの対象になりうるような存在ではまったくなかった。憤怒と恨みに満ちて、工場主の娘にあからさまな敵意を向けてくる。彼女にとってそんな彼らとの出会いは、自分が積み重ねてきた経験や思考にすんなり接続させることのできない、不穏で耳障りな不協和音との遭遇にほかならなかった。

その後も彼女は、それまで抱いていた「貧しい人々」の感傷的で哀れなイメージをつぎつぎと突き崩されてゆく。寄宿学校から実家に戻る前に、パウリーネはエリザベトと話し合い、それぞれが身近な貧しい子どもたちにクリスマスのプレゼントをしようと約束していた。クリスマスとなり、彼女は約束どおり工場労働者の子どもたちを招いてお菓子や果物をプレゼントする。だがその反応は彼女の予想を超えるものだった。

青白く小さな唇を開いてパンを求めねばならず、しかしたいていもらえない、そんな子どもたちの鈍く沈んだ目は、動物のように押し黙った忍従の色をしていた。小さな子どもらはクリスマスツリーのところまで導かれ、赤いリン

ゴヤクルミを詰め込んだ暖かい前掛けや靴を渡されたが、なんともいえない顔をして見つめあうばかりで、感謝することも歓喜の声をあげることもない。ほんとど喜ぶ様子もなく、ただ本能のままにもらった実を口に運んでゆく。毎日の苦しみと労働のために、もうなにも感じることができなくなっているのだ。自分を取り巻く不幸な子どもたちの様子を見て、パウリーネは声をあげて泣くよりほかなかった。(110)

右の場面では、過酷な環境のなかで感情を失った子どもたちの姿が衝撃的に描かれているが、年端もいかないうちから工場で働かされる子どもたちの悲惨は、この作品でとくに力を込めて告発されている社会問題のひとつである。子ども一人が工場の機械で大怪我をしたとき、その自宅まで駆けつけたパウリーネが見たものは、感傷的に彩りようもない陰惨な光景だった。

腐った苔と藁の山の上に、穴だらけの古びたボロ布でかろうじて覆われた二人の子どもがぐずぐずと泣きながら横たわっている。一人は十歳くらいの男の子で、もう一人は七歳の女の子。部屋の別の隅にはまだ四、五歳の二人の少女がうずくまっている。どの子も青白くやつれた顔をしており、鈍くほうけたような目で前を見つめていた。薄暗い小さな石油ランプの鈍い光に照らされると、その姿はもっと不気味だった。不潔なボロ布に包まれ、無表情の顔に乱れた髪が垂れ下がったその姿は、生きた人間の子ともというよりはまがましい小鬼のようであった。(160)

「まがましい小鬼」のような子どもたちの母親もまた、哀れよりも恐怖をかき立てる様相で登場する。痩せて背ばかり高く、「のっぱのりぜ」と呼ばれるこの母親は、真っ青になって唇を震わせながらパウリーネを睨みつけ、驚いて縮

み上がってしまった彼女を容赦無く威嚇する。工場の機械を呪い、工場主を呪い、「あんたらに子どもが殺される」と怒鳴りつけてくるリゼに、パウリーネは返す言葉も見つからない。ただ、この場面の彼女には変化も見られる。それまで彼女は、目にした現実を受けとめることができずに取り乱したり泣いたりするばかりだった。しかしここでは必死でこらえてなんとか落ち着きを保ち、黙って子どもたちに食べ物を与え始めるのである。

このようにパウリーネは、工場労働者たちとの出会いを通してそれまで知らなかった過酷な現実を目を開かされ、怯えうろたえながらも徐々に自分なりに対応できるようになってゆく。エリザベトについても、パウリーネほどに劇的なかたちではないものの、未知であった貧困の現実と徐々に向き合ってゆくさまが描かれている。彼女の場合、初めて心を寄せたタールハイム先生が貧困に苦しんでいると聞いたことから、それまで想像もしていなかった貧困の現実を知ることになった。しかしそれでも、パウリーネを介してふれた工場労働者たちの悲惨は、彼女の予想をはるかに超えていた。それまで彼女は工場で働く貧しい労働者について、野蠻でやかましく、嫌悪と同じくらい恐怖を感じてしまう存在くらいの認識しかなかった。けれどもパウリーネから渡された、フランツ作のパンフレットによって目を開かされる。『貧しき人々の暮らしから。フランツ・タールハイムによる物語、人間の友であるすべての人に捧ぐ。』こう題されたパンフレットに目を通した彼女は、低賃金で暮らしが成り立たず、先に望みもない労働者やその子どもたちの現状にのいて震えながらこう叫ぶ。「こんなに途方もない不幸があるなんて。いままで私はなにも知らなかった。」(二六)

このように二人の少女は、労働者たちとのかかわりのなかで、自分が「いままでなにも知らなかった」という事実を否応なく思い知らされる。視界に割り込み、遠慮なく威嚇してくる新しい現実を、自分がそれまでの人生で培ってきた経験や思考とどのように接続させ、どのようにこれに応答すれば良いのか。この作品で貧困のエピソードを通して浮かび上がっているのは、そうした問いである。そして主人公の少女たちに特徴的なのは、知らなかった現実を前にしたと

きに、うろたえ取り乱しながらもこれから逃げようとはしないことだろう。パウリーネは最初、労働者たちのふるまいや言葉が怖くてたまらず、彼らが自分と同じ「人間」であることすらも疑っていた。「ああ、神様、これが私と同じ人間だなんて！」(二二) しかしフランクに諭され、助けられながら、同じ「人間」として彼らとかかわる姿勢をなんとか保つ。そして自分から彼らの経験領域に近づき、次第に、彼らが見ているものがなんなのかを深く考えるようになる。エリザベトも、友の言葉や自分が見たものから自分のそれまでの偏見を認めて、あらためて社会の構造的な矛盾について考えはじめる。

「異質なものの」にひるみながらも背を向けることはなく、問題のありかについて自分なりに考え続ける少女たちの姿は、新しくあらわになった社会問題とどう向き合うかという問いに対する、ひとつの答えでもあるだろう。その一方でここでは、同じ問いについて、少女たちとは対照的な、もっとネガティブな反応も書き込まれている。二つの対照的な反応が並べられている箇所として、少し長くなるが、エリザベトが自分の問題意識を家族や客人に伝えたときのやりとりを引用しよう。

(エリザベト…)「こういうことはこれまで考えもしなかったの。私はいつも下層の人たちを遠くから眺めていただけだったから。朝から晩まで平和に働いて、満足そうにしていると思っていたの。この人たちは他のやり方を知らなくて、毎日の辛そうな仕事も、彼らにとっては喜ばしい日常なのだと。彼らは一見苦役を課されているけれど、それはおそらく、財産持ちが心の中で戦い抜かなければならない苦しみよりは、ましなんだって。」

「実際その通りでしょう」彼女の母親が口を挟んだ。「私たちからみて不自由そうでも、あの人たちにはそうじゃないんですからね。いろんな点で私たちよりむしろ幸せなのよ。空腹が食事を美味しくしてくれるし、仕事で疲れ

ているから、ベッドが硬くても、柔らかい布団の中の私たちよく眠れるの。休日の喜びも格別で、私たちには想像もつかないくらいなんです。」

「確かに」とアーレンスがうけあう。「下層民の不満の原因は、彼らの道徳的な墮落だけなんです。怠惰にお酒、あらゆる種類の放蕩。彼らが見せびらかす不幸というのは、そうしたもののせいでしょう。私たちの目を引いて憐れみを誘い、それで不道徳な生活を続けるための資金をもらおうとするわけです。」

エリザベトは急いで割って入り、先に言い終わらなかつた話を続けた。「違う、違うの。違うってことがいまはわかるの。私たちからそんなに遠く離れていないところに、彼らの地獄の最悪の実例があるんだわ。それを見て以来、私は何度も自問しました、この不幸な人たちがこんなきつい労働に、それでも自発的にたずさわるのはどういうことだろう、と。だって彼らのわずかな日給では、幸せな時を一時間も買うことができないのよ。良心なのか。道徳なのか。——そんなものが歯止めになるのかしら。あんなに墮落しているように言われて、実際墮落させられてもいるのに。もしも彼らの毎日が、自分に対する不当な抑圧の積み重ねなのだとしたら。そうしたら、誰かが言い出してもおかしくないと思うの、向こうが誠意を見せないのなら、なぜやり返さないのか、て。」(264f.)

現実をより良く見ようと努め、「彼ら」が見ているものについて考えを深めるエリザベトとは対照的に、彼女の母親や客人アーレンスは、すでにあらわになった現実にもかたくなに目を閉ざし、それによつてこの現実を存在させまいとする。それはたんなる鈍感さのあらわれというよりもむしろ、目の前の問題があたかも見えないかのようにふるまうことで、これが事実として存在し始めることを防ごうとする、自己防衛の身ぶりにほかならないだろう。社会の変動期にあつて、そんなふうにかたくなな「防衛」に徹するのは貴族だけではない。パウリーネの父親である工場主フレヒナー

氏は、娘に現状の悲慘を訴えられると、右の貴族たちよりもさらに断固とした拒否反応を示す。彼は紡績事業で大儲けをし、海外にも大きな工場を所有するやり手の資本家という設定だが、利己的で態度は傲慢、虚栄心と猜疑心ばかりが強い卑小な人物として描かれており、人であるうと土地であるうと、すべて金を増やすための道具としか思っていない。そんな彼に、パウリーネは工場労働者の処遇を改善してほしいと再三訴えるのだが、彼はまったく聞く耳を持たない。物語の終盤で、とうとう工場労働者たちが暴動を決行したときも、その偏狭な態度は変わらなかった。このとき、イギリスから購入したばかりの新しい機械を打ち壊されて取り乱した彼に、パウリーネは必死で次のように呼びかける。

「お父さま、一度だけでいいから私の忠告を聞いて。この人たちはいつもあなたを恐れていて、自分の受けたひどい扱いはすべてあなたのせいだと考えています。——彼らがこのまま暴れ続けたらどうなるでしょう？ 聞いてください、私は私なりに彼らの助けになってきました。だから彼らは私のことは愛してくれて、私には手をあげることもないの。さあ、お父さま、一緒に出ていきましょう、勇気をもって——そしてみんなに聞いてみましょう、なにが欲しいのかって。家に帰るよう、職場に戻るよう説得しましょう、もっと良い賃金を出すつもりだって言っているのよ。子どもたちは学校にやり、工場で働くのは一日四時間だけにするからって。(…) さあ、お父さま、一緒に来て。今回だけはあなたの娘の言うことを聞いてちょうだい！」(380)

賃金の向上、子どもの通学、子どもの労働時間の制限というのは、パウリーネが悩み自問したすえにたどり着いたひとまずの答えなのだろう。彼女は父親に対して、貧困で苦しんでいる人に高圧的にばかりふるまってはならないことや、相手の状況をもっとよく知らねばならないことを必死で説く。しかしフレヒナー氏は娘の頭がおかしくなったと決めつ

ける。「お前は気が狂ったのだ、私は愚かものの言うことなど聞かない！」(280) こうしてこの父親は、頑なな態度から抜け出すことができないまま、結果的に娘を死に至らしめる悲劇的な破局に加担してしまうのである。

貴族やフレヒナー氏のエピソードは、社会的な問題に対する、後ろ向きで自滅的な応答の例となっている。同様に、破局を誘発する危険な応答の事例として、ここではさらにもうひとつ、衝撃的なエピソードが差し挟まれている。その前提には、労働者の現状を少しでも良くしたいというフランツの健気な試みがあるので、まずはこの試みに目を向けておこう。

フランツは工場労働者の苦境と貧困を世に訴えるパンフレットを出すだけでなく、若い労働者を組織して労働者たちの互助の輪を作ろうとしていた。その成果は、ある休日の晩の光景として次のように描かれている。

若者たちは皆、長いテーブルの上に置かれた木のベンチに向かい合い、歌を歌っている。リードはフランツ・タールハイムとヴィルヘルム・ビュルガーだ。親しい友情で結ばれたこの二人の若い労働者が力を合わせたおかげで、いま私たちが見ているような集まりが実現したのである。それは未婚の労働者全員に呼びかけて作った組合であった。

カードに触れない。

火酒を飲まない。

酒場で借金を作らない。

工場主から賃金の前払いを受けない。

これがこの組合の規律団体としてのルールである。それだけではない。各メンバーは、共同の基金に毎週少額を拠

出していた。日曜と水曜の晩の集まりではこの基金から酒場の主人にビール代を支払い、みんなで歌ったり読んだりするための楽譜や本も、このお金から出していた。さらにいつもある程度のまとまったお金を保管しておき、会員の誰かが病氣になったときの援助に使うこともできた。(121)

どこからも助けがない苦しい状況にあつて、それでも潰されることなく墮落に落ち込むまいとするフランチたちのこうした試みは、現状を乗り越えるための確かな希望となっていた。けれどもフランチはある時、仲間から、不審な紳士に目をつけられていることを知らされる。この仲間は問題の紳士に酒場で声をかけられたのだという。

「やつこさん、俺らがフレヒナーの工場で働いてるのかと聞いてきてよ。そうだと言ってやったら、まあ根掘り葉掘りいろんなことを聞いてくるのさ。どんな感じだとか、なんか集まりみたいなのはやってるかとか、全体的に満足してるとかしてないとか。俺らはなんでもあけっぴろげに答えてやったね。みんなよく働いてる、でも稼ぎは少なえ、それに子どものあつかいはひどいもんだってな。やつは俺らの話に同情しているふうだった。で、もっと聞いてきたのさ。君たちは状況をどうにかしようとしたり、不満を言いふらしたりはしないのかってな。アントンは、俺らの集まりのことを話した。それを聞くと、あいつの目がなんとも言えない色になってな。半分ショックで、半分嬉しいみたいだった。」(107f)

シュテューフェルと名乗ったこの紳士は本名をシューマッハーといい、社会に批判的な不穏分子を探し出そうとする秘密警察であつた。彼は、フランチが呼びかけた労働者組合を過激な組織と決めつける。そして工場主フレヒナーの自宅

まで押しかけ、フレヒナー氏に、フランツたちは危険だ、もっと厳しく押さえつけねば大変なことになるだろうとふきこむ。そのせいでフレヒナー氏は猜疑心に囚われてしまい、パウリーネの必死のとりなしも無視して、労働者たちへの締め付けを強めるのである。

秘密警察シューマッハーのエピソードは、姿をあらわした不都合な社会的現実には、「脅威」と「安全保障」の論理で応答した事例である。この事例を通して、「脅威」の論理がいかに不信と猜疑心をあおり、「安全保障」の論理がいかに過剰防衛の暴力を呼び込むかが詳しく描かれてゆく。シューマッハーの介入のせいでフレヒナーと労働者たちの対立はエスカレートし、もはや暴動は避けられないものとなる。とうとう労働者たちはフレヒナーの工場にだれ込んで機械を打ちこわし、最終的には軍隊が介入、怒れる労働者たちに銃を向ける。混乱のさなか、パウリーネとフランツは流れ弾を受けてあえなく命を落とすのである。

不可視であつた社会問題が目に見えるものとなったときに、これを自分の経験や思考とどう接続させ、どのような思考やふるまいにつなげてゆくのか。『城と工場』ではこの問いが、労働者の貧困のモチーフとともに提示され、追求されていた。否認や無視、敵視、過剰防衛といった複数のネガティブな応答の事例とそれがもたらした悲劇的な破局の描写は、新たな自己主張が目に見えるものとなったときに少なくとも「なにをしてはならないか」を明確に示すものとなっている。それに対して、少女たちの姿勢については、肯定的な事例ではあるとはいえ、「なにをすべきか」をそこまで力強く指し示してはいないかもしれない。噴出した怒りや苦痛や絶望をやわらげるために、また対立が死や暴力につながるために、彼女たちは結局あまり効果的なことはなにもできない。ネガティブな応答が呼び起こす負の連鎖はいったん勢いがつくとき止めようもなく、フランツとパウリーネは連鎖に巻き込まれてなすすべもなく命を奪われてしまう。とはいえ、彼女らは、すんなりと飲み込むことのできない不穏な現実を前にしてもこれから逃げることなくか

わりを続け、予測不可能な連鎖反応のなかに、なんとかして肯定的な未来への種を差し入れようと、試みを続けていた。その試行錯誤の描写には、実際に、未来への種として機能するかもしれないいくつかの手がかりを読み取ることもできる。たとえば、どれほどなじみのない、不安をかき立てる相手であっても、そのものもまた「人間」であるという大前提を手放さないこと。まだ人々のなかで十分に語られていない問題については、言葉にして人に語り、広く関心と呼び起こすようつとめること。進むべき道が見えにくいなかで行き詰まったときには、自ら育んできた考えや経験をふりかえりながら、これとの折り合いのなかで選択と修正を繰り返すしかないこと。迷い悩む登場人物たちの描写に浮かび上がっているこれらの認識は、パウリーネとフランツの死後も、エリザベトとヤロミニアに受け継がれてゆくのである。

#### 終わりに

『城と工場』において、社会問題が新たに顕在化したときの波紋が描かれるなかでは、問題に応答する側だけではなく、問題の当事者のあり方もまた問い直されている。すなわちここでは、当事者としての異議申し立てと自己主張がいったいどこまで許されるのか——暴力的な手段に訴えても良いのか——ということが問われてゆくのだ。この問いは女性ではなく男性登場人物、すなわちフランツをめぐる物語にゆだねられている。あるときフランツのもとに、「共産主義者」を名乗る者からの匿名の手紙が届く。現状の不正を説き、思い切って一歩踏み出すことを扇動するその内容に、フランツの心は大いにゆさぶられる。仲間たちはすみやかにこの手紙に感化されて一気に実力行使へと流れ、一方、抗いがたい魅力を感じながらもこれを「悪魔の誘惑」とも感じて躊躇するフランツは、資本家の娘パウリーネを愛していることもあって苦しい選択の前に立たされる。作品の終盤は、このフランツの苦悩と迷いに多くのページが割かれており、そのぶん少女たちの描写は少なくなっている。

共産主義者の誘惑、その裏にかいま見えているイエズス会の暗躍、秘密警察の画策、激化する労使対立——この作品の終盤には陰謀論的なサスペンスの仕掛けがいくつも組み込まれており、クライマックスに向けて煽るように緊張感が高められてゆく。その一方で、二人の少女の成長物語それ自体は消化不良に終わっている部分も否めないだろう。先に見たように『城と工場』では理想主義の発露としての恋愛を通して、また恋愛の中で目を開かされた貧困問題との対峙を通して、少女たちが社会的な自意識の主体になるさまが描かれていた。少女たちはそれぞれに紆余曲折をへて、父や母に対し理路整然と自己主張できるような確固とした言葉と姿勢を身につけてゆく。ただ、逆にいうとそこまでである。彼女たちが自ら獲得した言葉と姿勢をさらにどのように生かしてゆくかということは、すべてが怒濤のような暴動の混乱に巻き込まれる結末とともに、具体的なかたちを結ばないまま終わっている。

とはいえ、ここで「恋愛」と「貧困」が独特のかたちで作用しあい、そのなかで少女たちが自己主張の言葉を獲得するさまは、やはり興味深く思われる。最後に、この相互作用の過程で、貧困問題と女性問題とのつながりが、作者による社会批判的な論考とはまた別の仕方では浮かび上がっていることを指摘しておきたい。

最初にふれたように、男性が女性を養うことを前提として回る社会では、女性は常に潜在的な貧困予備軍であり、その意味で女性と貧困は必然的に結びついていた。そうした経済構造に起因する女性と貧困のつながりを、ルイーゼ・オットーはその社会批判的な論考のなかで繰り返し問題化しており、このつながりを断ち切るために、女性が結婚以外の選択可能性を持ち、男性の力によらずに自活できるよう支援する必要があると主張している。<sup>(17)</sup>

ただ、『城と工場』においてこの女性の経済的自立という主題は中心には置かれていない。貧しさを恨みながらもしたたかに生きるタールハイム先生の元妻アマリーエや、ヤロミニアのかつての愛人で女優のベラ、夫を逮捕されてどん底に落ち込んだ「のっぽのリゼ」のエピソードを通して、働く女性や女性の経済問題も、確かに印象的に主題化されて

はいる。とはいえやはり主人公の少女たちが裕福なお嬢様という設定であるため、どうしても経済の主題は副次的なあつかいにとどまっている。

その一方でこの小説では、経済構造上の問題とは別のレベルで、「女性」と「貧困」のつながりが示唆されてもいるだろう。確認してきたように、ここでは貧困問題を通して、「それまで見えていなかったものが新たに見え始めた」とにともなう波紋が描かれていた。人びとに十分に見えていなかったものを目に見えるようにし、それによって波紋を呼び起こすというのは、女性運動家としてのルイーゼ・オットーがもくろんだことにほかならない。冒頭で紹介したように、彼女はその論説文の中で、「女性」の現状には社会の構造として問題化せねば対処できない不都合があり、この不都合にみなもつと目を向けるべきだということを「忘れてはならない」という言葉で訴えていた。「自由は不可分である」という論文には次のようにある。

自由のために生き、自由のために死ぬという思いに駆られた男性たちのうち、「すべての」人のために、「すべての」民衆のために戦おうと思っているものは何人いるだろうか。何千人もの男が、気安く名乗りを上げてくれる。しかし、彼らもできる限り奮闘しているとはいえ、そこで考えられているのは人類の半分、つまり男性のことだけである。<sup>(18)</sup>

「女性」という社会的位置から見える問題は、「男性」という位置からは見えにくい。「男性」の位置のみを前提にして「すべての」人について語るならば、この位置にいないものの目線は簡単に忘れ去られてしまうことになる。ルイーゼ・オットーは、「すべての人」という言葉で見えなくなってしまう現実をもっと見るようにと訴えており、働く女性に特

徴的な「見えにくさ」の問題をたとえば次のように書いている。

男性労働者は、常に特定の法人を形成し、職工やギルドの同志としてすでに何らかの結びつきを持っているので、組織の形成も容易である。しかし女性労働者を組織化しようとしても、そのような基盤が欠けている<sup>⑨</sup>。

お針子や女中として、私的領域で働くことが多い女性労働者たちは、個々の家族にばらばらに雇われているので連帯しにくく、また雇い主との関係性も密になりやすいために不満を言いにくい。これに続く文章のなかでルイーゼ・オットーは、そこから生まれる苦境を具体的に描き出して、働く女性の困難が表に出にくくなるその構造を浮かび上げさせている。

忘れられていることへの不満と、忘れ去られることへの危機感を基調とする彼女の論考には、すでに存在するものを存在するように見てほしい、という訴えが込められてもいるだろう。新しく存在を主張するものたちは、不安や居心地の悪さ、また面倒や軋轢の種ともなるかもしれない。けれどもそれがすでに存在している以上、「すべての人」を掲げるのならば、この存在も勘定に入れて考えねばならないことになる。では勘定に入れるために、具体的にどのような方策や姿勢が必要なのだろうか。この問いに、ルイーゼ・オットーがその論文記事で「女性問題」について取り組んでいたとするならば、小説『城と工場』では、同じ取り組みが「貧困問題」の文脈において試みられている。新しくあらわれた現実を否認し、「脅威」や「安全保障」の論理に走るのではなく、相手の文脈をよりよく知るための試みを継続すること。『城と工場』の少女たちに特徴的だったこの姿勢は、貧困問題だけでなく、そのまま性差をめぐる問題と向き合うときの示唆ともなりうるものだろう。一九世紀半ばにおいて貧困問題と女性問題は、ともにそれまで見えてい

かった現実の新たな可視化を意味しており、だからこそ、そこからうながされる問いや思索や課題は、たがいに重なりあってもいたのである。

## 註

- (1) シモース・ド・ボーヴォワール：『決定版 第二の性 1 事実と神話』（河出文庫）、『第二の性』を原文で読み直す会翻訳、河出書房新社、二〇二三年、二七九頁。
- (2) Louise Otto-Peters: Programm. In: „Dem Reich der Freiheit weh’ ich Bürgerinnen.“ Die Frauen-Zeitung von Louise Otto. Hrsg. und kommentiert von Ute Gerhardt, Elisabeth Hannover-Drück und Romina Schmitter. Frankfurt a. M.; Syndikat 1980, S. 39.
- (3) Louise Otto-Peters: Für die Arbeiterinnen. In: Die Frauen-Zeitung, a. a. O., S. 135.
- (4) Louise Otto-Peters: Für die Arbeiterinnen. In: Die Frauen-Zeitung, a. a. O., S. 137.
- (5) Vgl. Ute Gerhardt: Frauenbewegung und Feminismus. Eine Geschichte seit 1789. München: C. H. Beck 2011, S. 33.
- (6) Vgl. Gerhardt 2011, a. a. O.
- (7) ルーザ・オットー＝グーターズの伝記について、参照：Johanna Ludwig: Eigener Wille und eigene Kraft. Der Lebensweg von Louise Otto-Peters bis zur Gründung des Allgemeinen Deutschen Frauenvereins 1865. Nach Selbstzeugnissen und Dokumenten. Leipzig: Universitätsverlag 2014.
- (8) Louise Otto-Peters: Für die Arbeiterinnen. In: Die Frauen-Zeitung, a. a. O., S. 139.
- (9) Louise Otto-Peters: Assoziation für Alle! In: Die Frauen-Zeitung, a. a. O., S. 59.
- (10) Christine Otto: Emanzipation der Frau als literarische Innovation. Weibliche Vorbildfiguren und emanzipatorische Protestkomplexe im frühen Romanwerk (1843-1852) von Louise Otto-Peters. In: Autorinnen des Vormärz. Jahrbuch Forum Vormärz Forschung 2 (1996), Bielefeld: Aisthesis 1997, S. 131-162, hier S. 131.

(11) 以下にリストがある。Otto 1997, S. 161.

(12) たとえば以下でも『城と工場』はもっぱら「社会小説」として取り上げられている。»Feenpaläste, Industriekönige und weiße Sklaven«. 175 Jahre »Schloß und Fabrik« von Louise Otto und Frauenarbeitswelten heute. Berichte vom 26. Louise-Otto-Peters-Tag 2021 in Meissen. LOUISE um 40. Hrsg. im Auftrag der Louise-Otto-Peters-Gesellschaft e. V. Leipzig von Gerlinde Kämmerer. Marktleeeberg; Sax Verlag 2023.

(13) Zit. nach Ludwig 2014, S. 111f.

(14) テキストは以下を使用する。引用は括弧内にページ数のみを記す。

Louise Otto-Peters: Schloss und Fabrik. Roman. Vollständige Ausgabe des 1846 zensierten Romans. Hrsg. von der Louise-Otto-Peters-Gesellschaft e. V. Mit einem Vorwort von Prof. Dr. Godula Kosack, einer Einführung von Dr. Gisela Notz und mit einem Nachwort von Johanna Ludwig. Leipzig; Hentrich & Hentrich Verlag. 2021.

(15) Zit. nach Ludwig 2014, S. 41.

(16) ちなみにシラー的な理想主義が性差の制度に批判的な自己主張を支えるという構図は、女性運動家としてのルイーゼ・オットー自身にも特徴的なものである。彼女は一八七四年に次のように書いている。

ずっと昔から、そう子どもの頃から、シラーとその理想的女性像に対する感激が私の魂に養分を与え続けてくれました。自分の運命に耐え、その一部を自分で作り上げる勇氣も、世界を相手に戦い続ける勇氣も、この養分がなかったら、どこからも湧いてこなかったと思います。(…) 私たちとこの協会が心を捧げている女性のための戦いは、世界とその古びた法令や偏見を相手にしています。若い女性たちにもシラー的な感激の養分を与えるならば、勝利に

それだけ速く近づくことになるでしょう。この感激は、偉大なものを欲し、偉大なる意志を持つこと、そして自らを全体に向けて、全体のために鼓舞することにつながるのです。(Zit. nach Ludwig 2014, S. 47.)

シラーの詩篇『女性の気高さ Würde der Frauen』(一七九五)では理想を追い求める主体はあくまでも男性で、女性は自足した無垢なる自然状態にあるからこそ尊いとみなされている。つまりシラーには、理想主義の担い手に性別で線引きをもうけるような側面も見落としがたく存在したわけだが、にもかかわらず彼の言葉が、線引きをむしろ打ち崩すかたちで作用したという事実は注目に値する。一九世紀前半において、シラー文学に励まされたと書き残した女性作家は、ルイーゼ・オットーひとりではなかった。テクストがその本来の文脈を超えて別の文脈の中で受容され、そこで生まれた認識や確信が新しい展開の端緒を作ってゆく、そのような流動的な広がりや、女性作家によるシラー受容には顕著に見てとることができるだろう。ただしこの受容においては、規範的な線引きがあらためて引き直されもしている。ルイーゼ・オットーは男女の伝統的な役割割それ自体を否定してはならず、男装や喫煙で線引きを意図的に越えようとしたルイーゼ・アストンにはかなり冷淡でもあった。いずれにしても、「シラーを読む女性作家」という現象は、近代化のなかで性にまつわる新しい主張が活発化した過程を知るうえで、これが常に一種の不可避的なねじれをはらんだ触発の連鎖にうながされていたことを伝えており、その点で興味深く思われる。

- (17) 女性が就労する必要性については、一八六六年に発表された以下の論考で詳しく論じられている。(ここでは、まさに『城と工場』もその一端であるような男女の恋愛礼賛の風潮が、少女の現実的な問題関心の発展を阻害するとして批判的にとらえられており、その点も興味深い。 Louise Otto-Peters: Das Recht der Frauen auf Erwerb. Blicke auf das Frauenleben der Gegenwart. Berlin: Hofenberg 2015.

- (8) Louise Otto-Peters: Die Freiheit ist unteilbar. In: Die Frauen-Zeitung, a. a. O., S. 41.  
(9) Louise Otto-Peters: Assoziation für Alle! In: Die Frauen-Zeitung, a. a. O., S. 60.